

平成23年10月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859）

スナヤツメ

東京都内の河川の魚類の生態系は、戦後の高度経済成長による汚水や河川の改修により、そして近年は外来種や国内移入種によって大きく変化しました。タナゴ類など絶滅したもののも多く、スナヤツメも激減してしまった魚の一つです。

スナヤツメはヤツメウナギの仲間で、脊椎動物の中で最も原始的な生物です。それは口が吸盤状で顎が無いことから、一般的な魚類とは別に分類され

ています。ヤツメウナギ類は、眼の後ろに1列に並ぶ7個のエラあなを眼に見立てて、本当の眼と合計してヤツメ（八眼）と呼ばれます。胸ビレも腹ビレもありません。

普段、私たちが蒲焼で食べるウナギは、ちゃんと顎が有り、エビや小魚などを主に捕えて食べています。河川や沼に生息し、7～15年で50～100cmに成長し、産卵のため川を下ります。ウナギの産卵場所は、長年のナゾでしたが、最近になり、グアム島の西方海域の海底山脈「西マリアナ海嶺」の南端付近ということが解かりました。6月ごろ産卵し、生まれたウナギの仔魚は「レプトセファルス（葉形幼生 12～60mm）」と呼ばれ扁平な魚体をしています。潮流によって半年かけて日本列島まで運ばれ、河川の河口付近にたどり着いた仔魚は、半透明なウナギ形に形態を変化させ「シラスウナギ（稚魚 50～60mm）」となります。12月～3月頃、体色が黒化し、河川を溯上し始めます。

ヤツメウナギ類も幼生期があり、「アンモシーテス」と呼ばれます。幼生は眼が皮膚の下に埋もれていて、口も吸盤状ではなく、エラあなもはっきりしていません。

ヤツメウナギというと、昔、干物が売られていたのを思い出します。これはカワヤツメという種類で、大きさは30～60cm、茨城県、島根県以北の本州と北海道に分布しています。アンモシーテス幼生期を川で4年ほどすごし、変態後、海へ下ります。海では、魚などの体表に吸着し、体液や血液、とかした筋肉などを食べます。2～3年後、成魚になったカワヤツメは産卵のため川を溯り、4～8月に産卵をし、一生を終えます。ビ

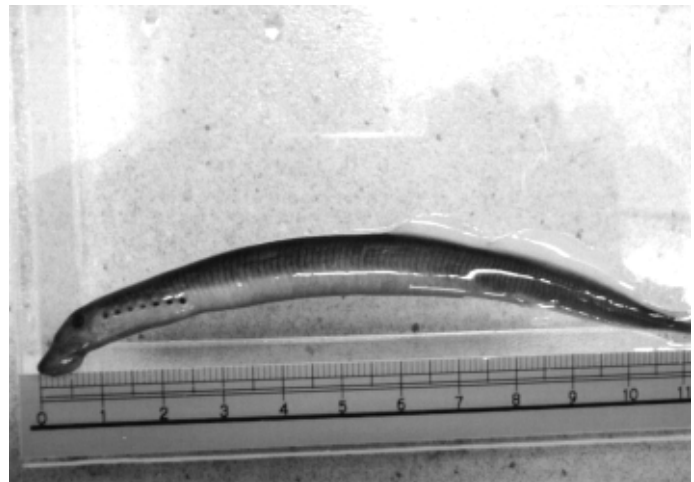


写真1 成魚（河辺地区にて採捕）

タミンAが豊富な魚で、蒲焼、塩干が美味だそうです。

スナヤツメはカワヤツメの様に海に下ることが無く、一生を淡水ですごします。日本各地に分布し、国外では中国北部、朝鮮半島、サハリン、沿海州に生息します。大きさは12～18cmくらいで、3～4年間アンモシーテス幼生期を砂泥底にもぐって生活します。砂泥中の細かい有機物やケイソウ類を食べます。4～5年目の秋から冬にかけて変態し、ただちに成熟に向います。成魚は吸盤状の

口器で礫などに吸着し、終生寄生生活をせず食物も取りません。4～6月頃砂礫底に小さな窪みをつくり、少数の雌に多数の雄が群らがりあった後、1対で産卵します。産卵は、石に吸いついた雌に雄が体を巻きつけ、互いに体を小さく震わせて放卵、放精します。産卵後は死亡します。

スナヤツメの色は、青みの強いものから黄金色のものまでありますが、普通は暗褐色で弱い金属光沢があります。不規則な雲状斑が現れる場合もあります。海へは下らないので銀毛はしません。「かんの虫（ひきつけ）」の薬として利用されます。

スナヤツメの都内における生息地は、多摩川の中・上流部、秋川、浅川などのきれいな自然の残った場所に限られます。アンモシーテスや変態後の若魚が好む地形は、河川改修によって真先に護岸されてしまう場所です。魚族保護のため、河川環境を良好に守る必要があります。

（文責 大久保 芳木）



写真2 アンモシーテスの頭部
（河辺地区にて採捕）